幼年教育研究年報　第37巻　35－36
The Annual Research on Early Childhood, 2015

保育者の主体性を生む「距離感」
― 幼研と私幼連の連携を振り返って ―

中　丸　元　良[1]

How kindergarten teachers create a sense of distance during research
― Collaborative research conducted by Hiroshima Private Kindergarten League and the Research Institute of Early Childhood Education ―

Motoyoshi NAKAMARU

広島県内のほとんどの私立幼稚園が加盟する（公財）広島県私立幼稚園連盟（以下「私幼連」）では，複数園の保育者が同じテーマで実践研究を試みる「教育実践研究会」（以下「研究会」）を約20年前から設置している。研究会は，現場の保育者が実践や経験を交換することで視野を広げ，保育の質の向上をはかるとともに，幼稚園の存在意義を確立させることなどを目的としている。また，そのためにも現場の保育者が主体的に研究に取り組むことを目指している。

しかし，保育者の多くは主体的な研究が重要であると分かってはいるものの，現実には日々の業務に追われたり，また「研究」というものが何となく敷居が高いもののように感じられたりして敬遠しがちである。そのため，研究会と言いながら，現実は受動的な「研修」の場になりがちであった。

このような状況を踏まえ，私幼連では，2008年度から広島大学大学院教育学研究科附属幼年教育研究施設（以下「幼研」）と連携するという形で研究会を進めることにした。それまでにも幼研の研究者には，個人として研究会に関わっていただいたことはあるが，組織同士としての連携は初の試みであった。この連携に当たっては，予め，あるいは研究を進める過程で，たびたび幼研の研究者と私幼連の「保育研究委員会（委員のほとんどが園長）」の担当者が話し合いを持ち，会の進め方について綿密に連絡を取り合った。

その一つはテーマの決め方である。保育者はそれぞれのキャリアや園の方針，環境などによって，悩みや取り組んでみたいことも異なっている。その中から共通のテーマを探すのは難しい作業であるが，これを研究者や担当役員が決めてしまうのではなく，時間がかかっても，参加した保育者自身が話し合いを重ねる中で共通点を見出すことが大切だと考えた。

もう一つは，研究者と保育者との「距離感」についてである。と言うのも，前述の通り，実践研究に慣れていない保育者は，「大学の先生」という立場の人を前にすると必要以上に緊張し，自分の意見が言えなかったり，教えを請う姿勢に戻ってしまったりしがちだからである。また，逆に研究者が引きすぎ保育者だけで進行するような場合は，ともすると日常の愚痴や雑談が主になり，それはそれで意味はあるものの，研究が進みにくいという状況になりがちだからである。

こうして実践研究を進めていくうちに，研究者だけでなく，大学院生の役割の重要性が次第に明らかになってきた。院生は年齢的に保育者に近いケースが多く，保育者にとっても気軽に話しやすい存在である。そして，研究の様々な手法についても，院生はまさに習得の最中にあるので，それを保育者と共有しやすい立場にあると言える。一方，院生も現場の実践については興味があるだけでなく，自己の研究の材料も現場には大量にあるため，それを得たいという気持ちにも強いものがある。つまりギブアンドテイクの関係でもある。そして，研究の進め方

1　公益財団法人　広島県私立幼稚園連盟保育研究委員長
学校法人有朋学園　かえで幼稚園園長

について研究者に相談しやすい立場でもある。それらから「共に研究をする」という関係が築きやすく，また，研究者と保育者とがほどよい「距離」を取るためにも，大変役立ったと言える。

このような中，2009年に研究会に参加した15名の保育者に，自由記述式アンケートと聞き取りで意識調査を行った。

調査の中のいくつかの項目について紹介する。

「参加した保育者個人にとっての研究会の意味」という設問については，研究や他園の保育者との交流を通じ，自分の保育を見直す機会になった（７件），子どもの見方や対応のしかたに変化があった（８件）など，成果を実感する回答が多くあった。

次に「研究を進める上で困難を感じたこと」に対しては，日常の業務の多さ（13件），研究という概念自体を把握するのに時間がかかった（３件）などの回答があった。

そして「研究者との関係」については，研究の方法などについて要所で的確な助言を受けられ，研究がスムーズに進んだという回答（13件）と，大学の研究者が前面に出なかったことで，依存的にならず，自分たちで主体的に研究を進めることができたという回答（４件）が多く出た。

さらに「大学院生との関係」については，保育者とは異なった視点を与えてもらい，物事の見方が多面的になったり研究方法についてのヒントが得られたりしたという回答（11件）が多くあった。また，年齢的にも近い大学院生と親しみが持てる関係の中で共に研究を進めるうちに，研究という概念が把握できたという回答が多数あった。

以上のことからも，現場の保育者が主体的で有意義な研究活動を続けることができたのも，他園の保育者との交流が生んだ仲間意識がモチベーションを支えた面もあるが，やはり，幼研の研究者や大学院生たちの，適切なサポート抜きでは考えることができない。

また，研究会の中では，学問的研究という形式的なものだけではなく，保育者が得意な体験型の研究方法も生み出された。その一例は，保育の状況を保育者が寸劇で再現し，対応方法を検討する「寸劇法」と名付けた，大変楽しくて有意義な研究方法である。このような創意工夫を生かした研究方法が編み出されたことからも，参加した保育者が，いかに主体的に取り組んでいたかがうかがえると思う。

私幼連と幼研が連携しての研究会は，2013年３月で一応終了した。一番主な理由は，幼研の先生方が多忙であるということであるが，他面から見れば，これまでの連携を通じて，主体的な研究の素地が私幼連の中にできてきたからとも言える。とは言え，このような研究会に参加するのは，県内全体で言えばまだまだ少数の保育者に過ぎない。私幼連としても，この研究会の楽しさと成果を現場の保育者に広めるとともに，園長，設置者などにも実践研究の意義を伝え，保育者の研究活動への理解と協力を求めていくことが必要だと考えている。

今後はこの期間に培ったもの，中でも幼研の先生方とのかけがえのない信頼関係を生かしつつ，時に助けていただきながら，保育の質の向上，ひいては子どもたちと保育者の幸せにつながるような実践研究を，私幼連として続けていきたいと思っている。